

安積原野のサムライたち ～郡山の開拓地と疏水路をたどる～

奥羽大学図書館長
安藤 勝

*本稿は平成29年11月11日、第64回奥羽大学歯学会における特別講演を記録したものです。
73枚によるスライドの映像は省略しました。

1 安積開拓プロローグ

1 これが安積大地だ 安積大地は阿武隈川から奥羽山脈まで東西13km, 本宮南部から須賀川まで15kmにわたる扇状地帯。安積開拓はほぼ明治6から明治18までにここを舞台として展開された。市役所の位置が標高245m。猪苗代が514m。高低差269m。この差を利用して、猪苗代湖から安積大地に水を流し、米を作り、産業を興し、東北第2の近代都市に発展した。

150年前、刀を鍛にかえて不毛の原野に挑んだサムライたちの夢物語はいかなるものであったか。飲水思源という言葉に倣い、改めて先人の苦難を忍び、今日の郡山を見つめるきっかけにしたい。

2 安場保和 明治4, 新しい時代へ向けて岩倉具視や大久保利通、伊藤博文らは欧米視察した。随行員として一足早く帰国した安場は明治5, 福島県令として着任、福島県士族の救済策を考えた。開拓に関心を寄せていた旧米沢藩士の中條政恒を福島県の典事に招聘、この地の開拓を彼に任せて明治8年12月、愛知県令に転出した。

3 中條政恒 中條はかねてから樺太や北海道開拓を夢見ていた。その夢の実現に安積原野は恰好の場であった。安場と中條のコンビ誕生により大槻原開拓は推進され、疏水開墾へとつながっていく。後年、中條は安積開拓の父といわれるようになった。明治5, 福島県典事、明治19, 島根県大書記官に転任。明治33年4月、開成山で死去。享年59。

4 中條政恒の顕彰碑 開成山大神宮境内に昭和7年建立。漢文2000字に及ぶ中條の生涯が記さ

れている。碑文の撰者は大久保利通の3男、大久保利武(大阪府知事)、肖像の彫刻は北村西望。碑文の全文は立岩寧著『中條政恒伝』に収録されている。開成山公園に孫の宮本百合子の文学碑がある。

5 出磐山と東北歯科専門学校 奥羽本学の姉妹校である専門学校のあるところが出磐の森。その西にこんもりした山が出磐山(でけいやま)。標高293m。中條はしばしばこの山に登り、一望に見渡せる安積大地を眺め、開墾策を練り、また自らの号を磐山と称した。困難に遭遇するとこの山に上り、決意を新たにしたいという。明治34, 中條を敬愛してやまない一人が山頂に「出磐山碑」を建立した。今、この山は自衛隊の射撃演習場になっており入山はできないが、その拓本は開成館で見ることができる。

6 郡山の豪商25人 福島県の事業として大槻原開墾(今の開成山一帯)が実施され、二本松士族28戸とその家族が入植した。思うように人が集まらなかったことから、中條は阿部茂兵衛、嶋原弥作、橋本清左衛門ら郡山の豪商に呼びかけ明治6, 民間資本による「開成社」を結成した。開成とは「開物成務」のことで、「万物を開発して事業を完成させること」を意味した。

開成社による開墾には102戸が入植、大槻原一帯(今の開成山から市役所周辺)が開墾された。

7 桑野1丁目 開墾は桑45万本の栽培から始まった。見渡す限りの桑畑、68町歩。安場の方針は殖産興業への一翼として養蚕業を興し、生糸の海外輸出にあった。桑野村は明治9に開村(700人, 203戸)、大正14(2,663人, 480戸)まで49

年間存続，以後郡山市に合併された。

8 開成社初代社長 阿部茂兵衛の立像 中條政恒顕彰碑に並んで建っている。阿部の経営する小野屋は呉服，両替，生糸などを営み，安積開拓に多大な貢献をなした。開成社の出資額は1位阿部茂兵衛，2位鳴原弥策，3位橋本清左衛門。開成社の収益は6年間ゼロであった。阿部は後年開拓の母と呼ばれた。

9 開成神社本殿 中條は当時「離森」といわれた小高い丘を「開成山」と名付け，遙拝所を設けた。明治9，明治天皇のご聖断を仰ぎ，伊勢神宮の分霊が奉納され，「開成山大神宮」が設立された。開拓者の心の安らぎの場所となり，今でも東北のお伊勢様として郡山市民に親しまれている。

10 五十鈴湖 開成山公園にある湖。伊勢神宮の五十鈴川にあやかり命名。灌漑用のため池として造成された。当初は上の池・開成沼も造られたが，後に埋め立てられた。今の陸上競技場のある場所である。

11 開拓の心 開成山公園に設置されている碑文「一尺を開けば一尺の仕合あり。一寸を壘すれば一寸の幸あり」。中條が草した県告諭書の一部であり，県の指導理念でもある。県は明治6年4月，県民に開墾の必要を訴えた。

「わが福島県内には手のつかない原野がたくさんある。なんともったいないことか。この原野を耕し，桑を植え，養蚕を営めば必ず富裕になり，幸福になる。一尺を開けば一尺の仕合せあり。一寸を壘すれば一寸の幸あり。いたずらに怠惰に過ごしては，今に貧困に苦しむようになる。県民各位は開墾の事業に参加されよ」。

この告諭書にたいして，一部の農民は猛反対した。入会地にある採草地の利権が失われ生きる糧を失うことにつながる。中條暗殺まで考えた人もいたという。しかし，中條の粉骨誠心の努力に感動し，彼らも開拓の協力者になった。

12 大久保利通の顔写真 明治維新の立役者。内務卿（事実上の首相）。安積開拓の恩人。殖産興業と士族授産を政治理念とした。明治9，明治天皇の東北巡幸に先立ち郡山に入り，中條との会談で安積開拓と疏水導入の件で合意，大久保の政治手腕により国家予算化が図られたが，その着工も

完成も見ずに，明治11年5月14日暗殺され，開拓計画の縮小が懸念された。

13 大久保神社 明治22，大久保の遺徳を永く伝えるため安積町牛庭に顕彰碑が建立された。鳥居や社殿はない。日本遺産構成文化財のひとつ。

牛庭原には明治15，旧松山藩の17戸が入植した。三嶋神社を祀っている。

14 モニュメント開拓者の群像 開成山公園に平成4設置された。郡山市のシンボル。製作者は湖南町出身の日本芸術院会員三坂耿一郎。高さ17.6 m。像は左から中條，大久保，ファン・ドールン。台座にクマ，サル，シカ，ウサギ。塔頂に市の鳥であるカッコウ。「安積原野の開拓はこの地より創まる」のレリーフがある。

15 安積野開拓顕彰碑 開成山大神宮境内。昭和56年10月除幕式。台座には開拓にやってきた旧藩名を銘記したふるさとの玉石が積まれている。先祖への感謝と子孫へ伝えたいという思いが込められている。国営による開墾は岡山藩，土佐藩，棚倉藩，会津藩，二本松藩，鳥取藩，久留米藩，米沢藩，松山藩などから500戸，約2,000人が入植した。

16 鳥取藩，久留米藩のふるさとの石 郡山市と久留米市とは昭和50，鳥取市とは平成17に姉妹都市を結んだ。

17 棚倉藩，会津藩のふるさとの石

18 開成館 安積開拓発祥の地 ここが開拓の司令塔となった。

19 開成館 県指定重要有形文化財，経済産業省認定近代化産業遺産。狐の丘といわれた場所に明治7（1874）建築。開拓事務所を置き，安積開拓の中心地となった。擬洋風建築。

明治9，明治天皇東北行幸の際の行在所，明治14の昼食会場としても使われた。現在，館内には安積開拓，安積疏水を中心とした各種資料が展示されている。開拓出張所長を務めた立岩一郎の官舎も復元されている。

2 安積疏水路をたどる

20 猪苗代湖から出発 猪苗代湖疏水（のち安積疏水）工事は明治12年10月28日，国営水利事業第1号として戸ノ口水門工事より始まった。その

前日、開成山大神宮で起業式を行い、伊藤博文内務卿、松方正義大蔵卿ら政府の重鎮が参列、国家の威信が示された。幹線水路52km、7つの分水路78km。竣工の通水式は明治15年10月1日。郡山は祝賀の喜びで賑わった。昭和16から新安積疏水370kmが加わった。

21 上戸頭首工 猪苗代湖の水が郡山に運ばれる最初の入口。

22 田子沼分水工 地下20mのところでは新安積疏水と新安積疏水に分かれている。

23 沼上発電所 熱海町安子ヶ島。明治32、県内で2番目にできた発電所。郡山の紡績産業に貢献。近代化産業遺産。郡山絹糸紡績会社が創設、動力源とした。

24 玉川堰 五百川に合流。奥羽大学の保養所無垢苑、ホテル華の湯のすぐそば。

25 熱海頭首工 丸守発電所の水と五百川が合流して再び新安積疏水に。疏水神社のそば。

26 安積疏水橋 当初はメガネ橋だった。工事は大分の職人たちが。安積疏水のシンボル。橋の下は五百川。延長53.5m、管径2m40cm。1977年3月製作。

27 第1分水路 熱海町安子ヶ島。対面原、喜久田町、日和田方面に分水される。

28 アヤメ咲くのどかな疏水路。さまざまな花が疏水路を彩っている。

29 王宮伊豆神社前 片平町王宮。1300年前の巡察使葛城王と春姫の伝説のある里。すぐそばに采女神社がある。

30 分水路 いたるところに分水路があり、安積大地に水を運んでいる。

31 水田地帯を流れる 緑のフェンスに囲まれて、牧歌的な風景を醸している。遠くに安達太良山や額取山が見える。

32 大谷1号水路橋 三穂田町大谷地区。サイフォン式水路800m。昭和35建設。

のんびり温泉から南の段丘に見える。夕日を浴びると見事な風物詩になる。

33 七つ池 須賀川市仁井田地区。郡山と須賀川の境。三穂田の鍋山、野田に近い。

34 疏水の終着地 安積町荒池地区。第7分水路の終点。民家の庭先から一般河川に流れ落ち、阿

武隈川へと運ばれる。

35 十六橋水門 猪苗代湖北西部戸ノ口地区。日橋川への吐き出し口。疏水工事はここから始まった。安積原野へ流すための猪苗代湖水位調整用として作られた。安積疏水のシンボリック構造物。弘法大師が16の塚をつくり橋にしたという伝説がある。戊辰戦争のときこの攻防がカギとなった。現在、近くの小石浜水門が調整門になっている。

36 ファン・ドールン銅像 明治のお雇い外国人。オランダの土木技術者。安積疏水の水量設計などを監修した。1906（明治39）アムステルダムで亡くなった。銅像は十六橋のそばに建っている。

37 奥羽大学キャンパス内の水路 キャンパス内の隧道から、善宝池に流れる。

38 安積疏水マンホール 安積疏水と記されたマンホールは極めて珍しい。

3 開墾地の表情

39 大槻原旧二本松藩入植者の碑 開成山大神宮境内。明治6、県令安場保和は旧二本松藩へ出向き大槻原への移住を勧奨した。現安積高校前の通りに明治6（1873）、28戸が入植、桑園を中心に開墾が始まった。開墾前の大槻原は17戸の農家だけ。秣場、雑木林などの入会地。605町歩。キツネ、タヌキが棲んでいた。

*入植者の碑 郡山の随所に御影石で10基設置されている。平成5～7年、郡山商工会議所青年部が企画、建立した。高さ2m、底部の円形台座は猪苗代湖を、柱の下部の荒仕上げは安積野の広野を表し、座石にはそれぞれ旧藩の入植事情が説明されている。

40 開墾率先碑 国道49号線沿いの開成山公園内。政府決定の「五百戸移住」の第1陣として久留米藩の先発隊8名が明治11年11月11日、郡山に到着した。彼らは一旦久留米に帰り、移住者を募り、141戸（580人余り）が入植（北久留米40戸、南久留米101）した。

41 久留米集会所 郡山に久留米という地名は2か所ある。対面原の北久留米に101戸、大蔵垣原の南久留米に40戸が入植した。どちらにも水天宮を建立、北には金比羅神社も祀った。

42 久留米開墾資料館 久留米3丁目（大蔵垣

原)。主なる展示資料は在中備忘録、大久保利通の伺書写、濟世遺言、山岡鉄舟の書、農具、すき、くわ、養蚕用具、生活用具など。管理人は報徳会代表中島武さん。彼は久留米移住者の4代目。明治14、明治天皇が久留米開墾地にお立寄りになり、松を植えられた。明治36、入植者30名が生活困窮のためアメリカへ再移住、うち10名は帰国した。

43 久留米開墾資料館展示資料 開墾地無代御下渡願 三条岩倉公秣金加入依頼書など。

44 対面原 五百川と藤田川にはさまれた台地。安子ヶ島、喜久田、日和田、熱海地区に広がる。久留米、棚倉、二本松、岡山藩などの旧藩士100戸が入植した。明治初年まで入会採草地だった。第1分水路が流れている。

45 三柱神社(みはしらじんじゃ) 喜久田町堀之内字外左エ門段にある。国道49号線棚倉バス停そば。棚倉、会津、二本松の三つの入植藩により建立された。

46 対面原(北久留米)旧久留米藩士族入植者の碑 日和田町北野に設置された。第1分水路が流れている。碑文の一部「明治13年7月31日、九州よりはるばる海陸を超え、久留米藩士がこの地、喜久田、山野井二村にまたがる対面原に移住し、寒冷不毛の地に衣食住もこと欠く窮乏に耐え、刀を鋏に持ちかえて朝したに夕べに血と汗の開墾事業に従事した。望郷に涙し、氏神に水天宮並びに金比羅神社を祀り心のよりどころとした。移住者数百一戸、開拓地370町歩に及んだ。今、かつての荒野は見渡す限りの美田となり、今日繁栄の礎となる。ここに往時を追想し、先人の功績を讃える」。

47 広谷原開墾碑 喜久田町広谷原の宇倍神社境内。

48 広谷原旧鳥取藩士族入植者の碑 広谷原は藤田川の南に広がる原野500余町。東部に旧鳥取藩、西部に旧土佐藩士族が入植した。明治14、鳥取から69戸(約300人)が入植、大正14までに38戸が転出した。郷里の鳥取県岩美郡宇倍神社の御分霊を奉祀し、こころのよりどころとした。

49 十四戸待合所(バス停) 安積街道沿い宇倍神社近く。鳥取士族14戸が入植した。

50 豊受神社(とようけじんじゃ) 喜久田町松ヶ作に祀られた。国道49号線喜久田町卸センターの西側。土佐藩71戸が入植した。日本遺産の構成文化財の一。

51 広谷原の雪原 冬は荒涼とした雪原だが、夏は一面の美田となる。

52 大槻町南原 会津藩士は南原に13戸、駒屋北原に3戸、塩の原に15戸が入植した。戊辰戦争で会津藩は朝敵といわれ、水の流れの悪い地域へ廻され、苦勞を強いられたという。第6分水路が流れる。

53 美女池 大槻町運転免許センター前。

54 美女池の案内板 静御前がこの池に飛び込んだという伝説が記されている。

55 片平町字庚坦原 大槻、片平、河内にまたがる御料地であったが、昭和10までには自作地になった。「明治24年12月、大槻村民167名はそのころ庚坦原と呼ばれていた原野を開拓したいと県知事に願い出ました。願いは、翌年4月に許可され、開拓が始まりましたが、国や県からの援助はなく、逆に借地料を納めなければなりませんでした。さらに、国営五百戸開拓では開墾した土地は10年で自分の土地になっておりましたが、この開拓では国から払い下げ(お金を出して買う)を受けなければなりませんでした」(開成館展示資料、明治31年 県庁資料)。第4分水路が流れている。

56 福島県安積郡片平村字庚坦原開墾の碑 猿田彦神社境内。

57 山田原入口 逢瀬町多田野地区。土佐藩35戸が入植した。この先にワイナリー工場、休石温泉があり、湖南町へ続く。

58 八菅神社 逢瀬町多田野地区。土佐藩開墾地。八幡神社と菅原神社の1字から。

59 三穂田町鍋山字四十坦原 米沢藩15戸が入植した。第6分水路が流れる。

60 三穂田町山口字上塩ノ原 県道長沼喜久田線に沿う。会津藩15戸が入植した。

61 安積町牛庭五丁目 伊予松山藩18戸が入植した。大久保神社、三嶋神社が近くにある。第7分水路が流れる。

62 青田原の開墾碑 本宮市荒井地区。二本松藩

56戸（対面原も含めて）が入植した。仙道古戦場そば。

63 開墾集会所 本宮市青田地区。集会所に開墾という名称が付いている。

64 老農塚田喜太郎之碑 喜久田町堀之内北原。塚田は農業指導者、文政4（1821）生まれ。61歳の時、奈良原繁が鹿児島から招いた。骨粉肥料や実蒔栽培などを指導、作物の大幅収量増に貢献した。開拓の恩人の一人。政府より農事功勞として顕彰された。70歳永眠。

4 今、安積大地に生きる（出会った人の物語）

65 三穂田町山口にて 田植えの女性二人。なにやら懐かしい感じがする田植風景。

66 日和町町梅田にて 女性 78歳。いわきから梅田の総合南東北福祉センターに越してきて10か月たった。毎日この丘陵地を散歩している。安積疏水がこの丘にも流れていることに驚く。ただここは疏水の末端のようで、水が少ない。田植えや刈入りは他の地より遅いようだ。

67 逢瀬町山田原にて 八菅神社そば。夫は土佐から入植して4代目。私は天栄村の羽鳥湖近くから嫁いできた。このような山村にも安積疏水は流れている。ありがたく思っている。

68 喜久田町菖蒲池にて 男性 90歳。豊受神社そば。昔、大工の仕事。今、60歳の息子が東京の電気関係の会社を定年になり、家に帰ってきた。私の祖先は土佐から移住、わたしは4代目。気の向くままに畑仕事をしている。

69 片平町峯三天にて 女性 72歳。星ヶ丘病院、瓜坪のそば。今、道端に花を植えているところ。周辺は段丘と水田。民家はほとんど見られない。昔はここまで車で食料品など売りに来たが、今は来なくなった。私の主人は県立高校の数学教師。定年退職してここに家を建てた。若いころ、飛行士になりたかったという。

70 逢瀬町北沢湖にて 女性 82歳。サイパン近くのテニヤンで生まれた。終戦2年後、アメリカ軍に助けられて日本に引き揚げた。アメリカ人はいいもの食べていた。私の人生は波乱万丈。10年くらい前からここ熊田さんの養鯉場で働かせてもらっている。

71 三穂田町鍋山四十坦原にて 男性 84歳。久留米移住者の4代目。5代目となる息子は交通事故で死亡した。10戸入植して3戸残った。7戸は開墾の厳しさから九州へ戻った。家の庭先にあったわが一族の碑が東日本大地震で壊れた。若い人は開拓の話をおまわり聞きたがらない。

72 三穂田町にて 水田地帯の一本道をゆっくり散歩中の70代男性。交通事故で脊髄損傷。郡山の病院で入院。ようやく歩けるようになった。自分の田んぼは人に貸して、家で食うだけの米代はもらっている。疏水の分担費用は払っている。

73 光が射し込む郡山の街並み ビッグアイからの眺め。光は郡山の過去、現在、未来のすべてを包み込んでいます。

今から約140年前、全国各地から、夢を抱えて安積原野にやって来た開拓者たち。彼らは武士から開拓者への馴れない生活、労働生産力の低い土地、食料の欠乏、返す当てのない借金、夜逃げ、脱落者の続出、こうした苦境に耐え、歯をくいしばり、未開地を切り拓き、今日の郡山を築いてきた。明治末年までに開墾地の90%は手放したという。多くの原因は借金のため。郡山市はいま、34万人に及ぶ中核都市に発展した。飲水思源という言葉はあるが、改めて先人の偉業を認識するとともに、来し方の開拓の歴史を胸に刻んでおく重みを感じる。

主な参考文献

- 安積開墾大観 松山傳三郎 大正15（1926）
 安積開拓120年～先人の夢に逢う 郡山市 平成9（1997）
 安積疏水百年史 安積疏水土地改良区 昭和57（1982）
 安積野士族開拓誌 高橋哲夫 安積野開拓顕彰会 平成9（1997）
 開拓者の群像～大久保利通と安積開拓 立岩寧 青史出版 平成16（2004）
 郡山市史 4 近代（上）第4章 開拓と士族授産 昭和44（1969）
 郡山市史 9 資料 中（開成社記録 p431～502、福島県開墾誌 p 503～579）

- 殖産興業と地域開発～安積開拓の研究 日本大学
安積開拓研究会 柏書房 平成6 (1994)
- 安積の時代～桑野村の誕生 『貧しき人々の群』
の舞台 高橋哲夫 歴史春秋社 平成6 (1994)
- 広谷原を拓いて～鳥取・高知開墾の歴史 矢部洋
三 歴史春秋社 平成14 (2002)
- 中條政恒伝～富強の基はこの地にあり～ 立岩寧
青史出版 平成25 (2013)
- 安積開墾政策史 矢部洋三 日本評論社 平成9
(1997)
- 久留米開墾百年史 同記念事業実行委員会 昭和
53 (1978)
- 開成社百年史 橘輝政編著 開成社発行 昭和
50 (1975)
- みずのみち安積疏水と郡山の発展 根本博 歴史
春秋社 平成14 (2002)
- 夢を実現させた男 先覚者小林久敬～猪苗代疏水
はこうしてつくられた 酒井徹郎 歴史春秋社
平成16 (2004)
- 湖水東注—中條政恒と安積疏水 海野周治 福島
民報社 平成16 (2004)
- こおりやま逢瀬ふるさと町史 逢瀬町史談会 平
成10 (1998)
- 安場保和伝 藤原書店 平成18 (2006)
- 大久保利通と安積開拓—開拓者の群像 立岩寧
青史出版 平成16 (2004)
- 安積開拓全史 立岩寧 青史出版 平成28(2016)
- 安積事業誌—翻刻と研究 中條政恒 安積開拓研
究会 平成24 (2014)
- * 「安積事業誌」は佐藤利貞、佐藤秀寿が島根県
大書記官時の中條方に寄留して、中條の所蔵資
料と中條の証言を基にして、明治21年7月に
起筆、同30年10月に完成した全14巻の編纂も
の。中條自身が朱を入れている。原筆本は郡山
中央図書館で所蔵。
- 大槻村最後の名主 相楽半右衛門伝 矢部洋三ほか
相楽マサエ発行 平16 (2004)